

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター カトリック仙台司教区・カリタスペース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

東日本大震災被災地にも、春が来ました。それぞれのカリタスペースでも、寒い冬から春になった喜びを、被災者の方々に味わってほしい、感じてほしい、という思いでいろいろ企画をたて、楽しい時間を過ごしました。石巻ベースと八木山オリーブの会では、お花見を楽しみました。今年は、なかなか暖かにならないため、いつお花見ができるのか心配していたのですが、急に暖かくなり、各地で「桜が満開」というニュースが流れはじめました。驚いたのはスタッフたちです。急いで、予定を前倒しにしなければなりませんでしたが、しかし幸いなことに、どちらも、満開の桜を楽しむことができましたようです。

また、2018年4月から、カリタス米川ベースが、「カリタス南三陸ベース」と改称いたしました。どうぞよろしくようお願い申し上げます。その南三陸ベースから、漁師さんを中心にした南三陸町戸倉地区にある波伝谷（はでんや）集落で、600年以上続いている戸倉神社の「お獅子（すず）さま」と呼ばれるお祭復活にかかわった話題と、南三陸ベースでも活動している仙台白百合学園中学・高等学校の半澤教諭より、震災当初から現在までの仙台白百合学園の取り組みについてご報告いただきましたので、ご紹介します。

南三陸 波伝谷の獅子舞

カリタス南三陸ベース 千葉道生

東日本大震災後、私たちは宮城県南三陸町戸倉地区波伝谷（はでんや）という集落の、小山漁業部の漁師さんたちの所へ、網の修繕などのボランティア活動にたびたび通っていました。いつの間にか仲良くなっていくボランティアさんと漁師さんの様子を見ていて、とても良い関係が築かれているなあと感じていました。

震災から1年が経とうとしている頃、漁師さんたちがとても楽しそうに獅子舞の思い出話をされていました。実際に現状を聞いてみると、以下のような内容でした。



獅子と漁師さん

津波で壊滅状態にあったこちらの集落では、獅子舞が火伏や健康祈願の為、毎年3月第二日曜日に実施されていた。伝統的な神事であり、南三陸町の無形民俗文化財として指定されている。東北学院大学が編集した東北歴史博物館発行の「波伝谷

の民俗～南三陸沿岸の村落における暮らしと諸相～」によると歴史は少なくとも600年続いており、春の祭典では稲頭が育つように、秋の祭典では収穫の感謝を込めて神輿を先導している。およそ全戸・全世代が関わり、行事を伝承していく過程で様々な世代間の交流も見られることなどから、集落における重要な行事として位置づけられていた。

町の伝統行事を行うことによって、震災で離れ離れになっている地区の人たちが集えるきっかけになる。子どもたちや働きに出ている人も参加できるように日曜日に行い、戸倉神社の春祈祷と合わせ復興祈願を兼ねて行いたい。朝から夕にかけて戸倉地区全ての仮設住宅を歩き回り、日本中から集まってくるボランティアにも感謝を込めて踊りを披露したい。

しかし、2体あった獅子をはじめ祭具は全て津波で流されてしまった。町の文化補助金の申請は、領収書の提出を要するため、活動の実績がない現状では難しい。今回は戸倉神社に約60年前から置かれている獅子頭を使用し、大太鼓・小太鼓の修復には義援金や氏子の奉納金をあてるが、笛や装束など最低限の失った祭具を何とかできないだろうか。将来的に町が復興していけば獅子を2体揃え、震災で壊れた神社なども自分たちの力で修復していきたい。

という被災した集落の存続に関わる重要なお話でした。

当時、カリタス米川ベースはカリタスジャパンと連携し、復興支援プロジェクトとして被災された方からの支援依頼を調整する活動も積極的に行っていたので「お祭りに間に合うように何とかならないだろうか」と思い、こちらの支援を進めていく事になりました。そして支援が決定し、お祭り当日は「こんなに楽しそうにしている漁師さんたちを見るのは初めてだな」と思い、私たちもとてもうれしかったです。

そしてこの度、この獅子舞が復活されるまでのドキュメンタリー映画が制作され、私たちが知らなかった、集落の中での人々の様々な話し合いや思いなどが記録されていました。震災前からこちらの集落の記録を撮影されていた方が監督となり、震災後の人びとの心を映し出しています。どんな地域でも多くの人が集まって話を進めていく上で様々な意見があり、乗り越えて行かなければならない事がたくさんあるかと思えます。しかし町や家族、全てを失った人たちが地域で一番大切にしてきた600年以上も続いてきたお祭りを復活させるという事は、宗教は違えども私達が教会や信仰を失ってしまうような悲しみを乗り越え、また結びついていく過程を描いているのではないかと感じています。

全国で順次公開されています。興味のある方、ぜひご覧ください。

「願いと揺らぎ」 監督 我妻和樹さん
<https://negaitoyuragi.wixsite.com/peacetree>

上映劇場

■横浜シネマリン（神奈川）

5月26日（土）～6月1日（金）12:30～

6月2日（土）～8日（金）10:00～

<https://cinemarine.co.jp/>

■名古屋シネマテーク（愛知）

6月2日（土）～8日（金）14:30～

<http://cineaste.jp/>



獅子とボランティアさんが一緒に記念写真



笛を吹いて大活躍の子どもたち

満開の桜の下で～石巻ベースのお花見遠足2018～

仙台教区サポートセンター/カリタス石巻ベース 濱山麻子

石巻ベースでは、3月までベース長を務めてくださったオタワ愛徳修道女会のシスター内原わさが退職され、代わって4月からスタッフとして聖母訪問会のシスター山下正子をお迎えしました。

新体制になって最初のイベントとして、オープンスペースを利用される被災者の方向けに、毎年恒例のお花見遠足を企画しました。石巻ベースでは、お花見の他に初夏のツツジやアヤメ見物、秋には紅葉狩りと、四季折々に遠足を行うのですが、なぜかいつも、花の見ごろに当たらなかったり、大雨が降ったり、通る予定の道が通行止めになったり、とタイミングが悪いのです。参加した方々には「カリタスの遠足で花を見せてもらったことがないね」と冗談交じりに言われるほどでした。それでも、「今年のお花見はいつ?」と期待の声を聞けば、企画しないわけにはいきません。行き先は、登米市の平筒沼(びょうどうぬま)ふれあい公園、予定は4月19日と決まりましたが、仙台で3月に桜が開花したというニュースを聞き、慌てて4月13日に変更しました。1週間前の下見の時点で桜は三分咲き。「満開なんてぜいたくは言わない、せめて雨が降りませんように…」とスタッフ全員が祈る思いでした。



そして迎えた当日の朝。ときおり日が陰るものの、晴れていたのでもずは一安心です。参加者の皆さん、そして仙台からのボランティアさんも、いそいそとバスに乗り込みました。出発するとすぐ、いつも元気いっぱいの方の司会で、まずはくじ引き大会が始まりました。ふだん、オープンスペースで様々な手仕事を楽しんでいる方々が企画してくださった、空くじなし、素敵な手作りの品が当たるくじ引きです。やむをえず当日は参加できなかった方からも「みんなで楽しんでね」と、景品が届いていました。「〇番の人はどこ?」「こっちこっち!」とお隣同士で声を掛け合いながら、全員の手には賞品が渡ると、次はカラオケ大会のスタートです。「あと30分で着いてしまうから、どんどん歌わいん!」「カリタスさん(スタッフ)も歌わいん!」と司会の1さんに乗せられて、にぎやかに過ごすうち、目的地が近づいてきました。沼のほとりの桜並木は、なんと満開! 車窓からの眺めに、ワーツと歓声が上がりました。



公園に到着して、まずは全員で記念撮影。満開の桜の下で、お弁当をいただきました。「お花見って言っても、こんなにきれいに咲いている下でお弁当を食べるのは初めて」「本当にきれい。良かったね」と、顔を見合すたびに、皆の笑顔も満開でした。



自作の歌詞カードを見ながら熱唱♪

帰りの車中ではカラオケ大会の第二部が繰り広げられ、皆の手拍子で民謡に演歌、懐かしの唱歌と続けました。道の駅を経由して無事にベースに到着し、皆さん笑顔で解散となりました。

最初から最後まで、参加された皆さんが、「みんなで楽しもう」と、和やかな空気を作ってくださっているように感じました。ボランティアさんは「ふだん、オープンスペースでお会いしているのとは違う皆さんの姿を見ることができました。楽しい時間を共有できてうれしいです」と分かち合ってくださいました。

新年度最初の企画を無事に終え、順調なスタートを切れたように思います。これからも、皆さんがひとときでも、元気に楽しくなる時間を作っていきますように、スタッフ一同心を合わせて頑張っていきたいと思います。



青空の下、満開の桜を見て、美味しいお弁当を食べて皆さん大満足の笑顔

桜吹雪の中で祈る

カトリック八木山教会 八木山オリーブの会 野田和雄

4月11日、宮城県亶理町のJR亶理駅に隣接する悠里公園(ゆうりこうえん)で、八木山オリーブの会のお花見を行いました。津波被災者とカトリック亶理教会と八木山教会の信徒が60名ほど集まり、桜の舞う中で楽しいひとときを過ごしました。

隠れた花見の名所といえる悠里公園は、当日は週日だったせいか「貸し切り状態」でした。その上、仙台ダルクの設営と亶理教会の台所を活用した地元力のサポートは文句なしの万全です。

亶理教会の長嶋治夫さんの挨拶の後、乾杯の器には桜の花びらが舞い込むという神様からの特別演出のプレゼントも加わり、参加者は美しい景色とおいしい宴を楽しんでいます。

6年目となるオリーブの会は、被災者とスタッフがすっかり仲良しで、おしゃべりの花も満開です。手品を披露する仙台ダルクのスタッフの背景には、桜とお城のような亶理駅舎があり、まるで城下町でお花見をしているように見えます。



花冷えで少し寒いと思っていたところ、熱々のおでんが到着。つい、口をつけようとしたところ、「食べる前のお祈りはどうしたの?」と被災者代表の青田辰子さんから注意され、笑い的一幕もありました。「食前の祈り」がすっかり定着したと、改めて感じました。この日、初めて参加したフィラデルフィ・パウロ神父も、被災者ののびのびした表情に、笑顔で自己紹介をしています。



初参加のパウロ神父と亘理教会長嶋さん



マフラーを寄付してくださった五井教会の中嶋さん(写真中央)

お腹が満たされると、フォークダンスを楽しむご婦人たちが、少女のように笑い、歓声が広がります。フォークダンスの輪が広がり、亘理音頭になると、踊りの輪もさらに大きくなりました。

踊り疲れたころ、マリアの宣教者フランシスコ会のシスター内田が準備したゲームが始まりました。新聞紙を丸めて棒にしたホッケーですが、ご夫婦でチャンバラをする人もおり、座はいやが上にも盛り上がります。あまりにも楽しそうなので、通りすがりの人も入ってきました。男性も加わり、ゲームはさらに盛り上がりました。

新聞紙でチャンバラとホッケーゲーム
皆さん楽しみながら白熱していました

千葉県のカトリック五井教会から応援参加してくださった中嶋寿美江さんは、手作りのマフラーをたくさん寄付してくださいました。花冷えに心温まるマフラーを着けて、なつかしい歌を歌い、5月の再会を約束しました。

亘理教会に戻ったスタッフたちは、いつものように、ふり返りをしました。「参加してよかった」、「被災者の方々に喜ばれた」と好評でした。

これからも、復興公営住宅の孤独に寄り添う傾聴の歩みを続けながら、教会協働で続けていきたいと願っています。



震災から7年を振り返る

仙台白百合学園中学・高等学校 半澤 康至

東日本大震災から7年がたちましたが、仙台白百合学園中学・高等学校では、震災当初から現在まで、震災に関する様々な取り組みを行ってまいりました。

私は、2010年4月に前校長青木タマキ マ・スール（現八代白百合学園高校長）から中高宗教科主任を任命され、2017年3月までその任を務めました。2011年3月11日に東日本大震災を経験し、震災当時のことを思い起こし、これまでやってきた学園や宗教科の震災関連の取り組みを振り返りつつ、学生たちが、ボランティア活動を通して、その時々で、心を込めて一生懸命奉仕する様子をご紹介させていただきたいと思います。

2011年3月11日午後2時46分、中高では6校時の授業中に大地震が発生しました。幸いにして負傷者は出ませんでした。児童・生徒・教職員約300人が学校泊を余儀なくされました。聖堂の香部屋からあるだけのろうそくを出し、役に立ったこと、近所のお寿司屋さんから無償でいなり寿司が提供されたこと、近隣の公立小学校からも非常食が回ってきたこと、学校から寮に移った児童・生徒に対し歯ブラシの差し入れをして大変喜ばれたこと、1,300人収容可能なホールが大きな被害を受け使用できず中高別々に聖堂で10日遅れの入学式が行われたこと、7月に始まった「絆のろうそくりレー」のこと等々、当時のことは今でも鮮明に覚えています。

震災では塩釜在住の在校生の家族と、閑上小学校出身で4月に白百合の中学校に入学することになっていた児童が犠牲になりました。心から永遠の安息をお祈りいたします。また、自宅が全壊・半壊してしまった生徒・教職員は相当数に上ります。震災で多くのものを失ったことは事実ですが、新しい出会いも生まれました。学園とポーランド・クラブ日本語学校との交流です。2011年8月、ポーランドからたくさんの手紙が学園に届きました。テレビで津波の映像を見たクラブの日本語学校の学生が日本を心配し、自分たちにできることは日本語で手紙を書くことだと話し合い、被災地のカトリック学校を探して送られたものです。手紙が入った段ボール箱は、シベリア鉄道、ナホトカ、新潟を経て、5ヶ月かかってまだ混乱していた仙台へ届きました。200通も手紙に生徒・教職員が返事を書き交流が始まりました。今では隔年でお互いの学校を有志生徒・教員が訪問するまでに至り、ポーランドの学生が訪日した際には必ず被災地に足を運んでいます。

学園では震災直後から救援物資を被災地に届けたり、個人でボランティア活動をしていましたが、遅ればせながら震災から2年後の2013年3月に宗教科で被災地ボランティアを呼びかけたところ、高校2年生と教職員の有志から賛同をもらい、被災地の一つ南三陸町を初めて訪問しました。以後、カリタス米川ベースのベース長・千葉道生さんと打ち合わせをし、被災地ボランティアを企画・実施しております。最初は、一見、更地と思いましたが、そこは重機が入りただ整備されただけで、瓦礫の処理にあると山のような生活用品が出てきました。少し前に近くではご遺骨の一部が見つかったという話も聞きました。



2013年3月 南三陸町でがれき処理作業に参加した生徒たち

朝から夕方までの作業でしたが、瓦礫の処理は、私たちの微力では、ほんの一区画しかできず、無力感すら覚えました。しかし、「わたしは大海に落ちる一滴の水、神の手にある一本の鉛筆」と言われたマザー・テレサのことばを思い出し、ボランティアの継続を決意し被災地を後にしました。

また、人と人との絆を実感できたことは本当に素晴らしいことで、この日から被災地ボランティアはずっと続きます。最大45人の高校生が南三陸町での被災地ボランティアに参加したり、有志でクロマツの植樹に出かけた時もありました。

震災から年月が過ぎると被災地の現状にも変化が見られました。瓦礫処理から始まり、漁業支援・農業支援・地域支援を経て、傾聴ボランティアが主になった頃、中学生も参加できる被災地ボランティアを企画したい、という声が生徒たちの方から上がり、仙台白百合学園中高「花を届け隊」が結成されました。被災地の方々に花を届け、笑顔になっていただきたいという願いから、初めに校内で募金活動が行われ、中高生・教職員が募金に協力し、種を買い、紫山の校地でたくさんの花を育てることができました。

2015年7月、いつものように千葉ベース長さんと相談をし、花を届ける1回目の訪問先が南三陸町の老人福祉施設に決まりました。施設の庭に花を植え、「お茶っこ」に参加し交流もできました。南三陸町・歌津町を中心に仮設住宅や障がいを抱えた子どもたちが通う学童保育の施設にも花を届ける機会がありました。



「花を届け隊」によって届けられた花

「花を届け隊」の1期生は卒業しましたが、先輩の思いは後輩へ引き継がれ、活動は現在も続いています。カリタス米川ベースでは、関東出身で住民票を登米市に移してまで働いている方々もいらっしゃいますが、男性、女性を問わず、本当に頭が下がります。これまでの被災地ボランティアはすべてが日帰りでしたが、今年1月、初めてベースに宿泊し活動する機会が持てました。しかも、同じカトリックの北海道・北見藤女子と合同で企画したボランティア活動が実現したのです。最後の分かち合いまで、ベースの方々には大変お世話になりました。今後ともよろしく願いいたします。



南三陸町での被災地ボランティアに参加した生徒と教員

宮城県では、3月11日を「みやぎ鎮魂の日」と定める条例が2013年3月に公布され、同年4月に施行されました。学園では、2014年から3月11日当日の午前に幼稚園から高校まで、児童・生徒・教職員が一堂に会し、ホールで鎮魂・復興祈願の集いを持っています。幼稚園児による合唱、小中学生の震災時の体験談と今後の決意、高校生によるボランティア活動の報告、共同祈願等々、毎年試行を繰り返しながら続けてきました。3月11日当日の午後には、午後2時46分に合わせ、地域の人々を交えた、祈りの集いを聖堂で開いています。

案内チラシを地域の回覧板で回したり、地元の大型商業施設や飲食店にチラシの掲示を依頼し準備にあたってきました。昨年3月11日は土曜日だったため、午後に聖堂でロザリオの祈りを中心とした祈りの集いを持ちました。そして、今年は日曜日と重なったため、3月9日の午後に、中高の生徒・教職員のみがホールに集まりました。中高各クラス・教職員でつくった共同祈願をクラス・教職員の順に唱えた後、震災後これまでのスライド写真がスクリーンに映し出される中、一人ひとり手づくりのペーパーフラワーを献花台に置きました。集いの最後に「花は咲く」を全員で合唱し行事を終えました。

2015年3月、2017年3月の2回、「バチカンより日本へ 祈りのレクイエム ～東日本大震災の鎮魂と復興を願うミサ・コンサート～」がそれぞれ聖堂とホールで開かれたことも強く印象に残っています。2015年、2017年共に、第1部ではモンテリーズィ枢機卿（聖パウロ大聖堂名誉大司教）、チェノットゥ大司教（駐日バチカン大使）の共同司式によるミサが荘厳に行われ、第2部ではイタリア・ロッシニ歌劇場管弦楽団によるレクイエム・コンサートが開催されました。

2015年は平賀司教が教皇謁見のため不在、2017年は前校長青木マ・スールが入院中で、心細さを感じながら典礼の準備を進めてきましたが、ローマ教皇庁大使館と事前に何度も電話・ファックスでやりとりをし無事に終えることができました。また、ボルデュック・エメ神父には多方面にわたりご協力をいただきました。あらためて感謝申し上げます。なお、2回のミサ献金は被災地の復興支援金として、カリタスジャパンに送金させていただいたことをこの紙面をお借りしてご報告いたします。

最後に、私事になりますが、この3月で前任校を含めて教職30年の節目を迎えました。東日本大震災の犠牲者に対する追悼の意を表し、記憶を風化させることなく後世に残さなければならないと考えます。これからも互いに愛し合い、分かち合うことのために命をいただいている重さを生徒に伝えていくことを決意します。感謝と祈りのうちに……。



みやぎ鎮魂の日

毎年、幼稚園から高校までの児童・生徒・教職員が一堂に会し、ホールで鎮魂・復興祈願の集いを持っています

《東日本大震災復興支援タオル 取扱終了のお知らせ》

いつも東日本大震災復興支援活動へのご支援・ご協力をありがとうございます。

2月下旬より呼びかけしておりました東日本大震災復興支援タオルは、全32都道府県からたくさんのお申し込みをいただき、5月上旬に在庫が全てなくなり、取扱終了となりました。

たくさんのご支援、ありがとうございました。

今後ともどうぞよろしく願い申し上げます。

仙台教区サポートセンター